

# タブ 1

【本文】

(信生法師の、京から東国への出家後はじめての旅の記録である)

昔は、前途を夕の雲の隔つることを恨み、後会を曉の月に憂ふる人も多く、又思ひ置くこともありしを、旧遊零落してなれば泉に返り、己が様々になりにければ、①(我も哀れにて)、遠ざかる都の梢を顧みれば、百千万茎の齊に異ならず。逢坂の関を過ぐるに、

逢坂の関に心や留め【2】都に人を思ひ置きせば

鏡山を越ゆとて、昔見しに変れる所々のありさまを、先のよすがまでも哀れにて、老いにける年の程も思ひ知られて、

鏡山知らぬ翁や映ら【2】今まで②(替へぬ姿)なりせば

小野の宿にとまりぬるに、君どものありさまのことに③(哀れなり)。世を渡る道、いづれも苦しき習ひなれば、ただ上の空なる世を頼み、契らぬ人を待つより外の事なく、かくしつつ、罪の積りもいとほしう、「又以貪著追求故、現受衆苦、後受地獄・餓鬼・畜生之報(又貪著し追求するを以ての故に、現には衆の苦を受け、後には地獄・餓鬼・畜生の報を受く)」この言葉更に疑ふべからず。

あはれなり誰と頼めぬ暮れごとにいくたび④(人)に物思ふらむ

世の旅人にならひ、妃がすぐれたる容、貴種豪賢のいみじき人とも、一度眼を閉ぢて後、⑤(これ)に違ふべからず。獄卒・炎魔の呵責、貴賤なかるべし。

▲いつかまた我もはかなく鳴海渦身の尾張には誰か連れむ

(「信生法師日記」による)

以下注釈

※旧遊零落して……………昔の友はすっかり落ちぶれてしまい

※君ども……………遊女

※卵……………邪淫などの罪

※貪著……………貪着。何かに執着すること

## タブ 2

【問題】

[1]

問一 傍線部①の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 旧友の半数は亡くなってしまったのに、自分は僧侶として第二の人生を謳歌しているから
- 2 落ちぶれてしまった昔の友人たちが、出家した自分の境遇を好き勝手に評価するから
- 3 旧知の者たちも亡くなったりそれぞれの道を辿ったりで、自分の老い先も知れているから
- 4 余命も短いのに、旧知の者たちが住み慣れ親しんだ都を離れて東国へ向かうから

[2]

問二 空欄 [2] (二箇所ある)に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 かし
- 2 まし
- 3 なむ
- 4 まほし

[3]

問三 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 出家していない姿
- 2 高貴な家柄と分かる姿
- 3 すっかり落ちぶれた姿
- 4 幼少期と変わらぬ姿

[4]

問四 傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 都で遊女をしていれば高貴な身分の男に見初められる機会もあるが、田舎では快楽の罪を重ねるだけだから
- 2 生きる道はどれも苦しいのが世の常であるのに、来世で報われる程度が最も大きい遊女の道を選んでいるから
- 3 現世で一度しか出会えないかもしれない宿泊人に恋をし、いつまでもその男にすがる以外に生きる道はないから

4 現世でははない男女の仲を頼りにするしかなく、来世では現世で貪欲だった報いを受けることになるから

[5]

問五 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 里人
- 2 公人
- 3 死人
- 4 旅人

[6]

問六 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 欲を追い求めたならば、来世では地獄・餓鬼・畜生の報いを受けるということ
- 2 美貌の持ち主や高貴で才能に秀でた者も、心の眼で見れば普通と変わらないということ
- 3 人間の死期は美醜や貴賤などの条件とは関係がなく、誰も避けて通れないということ
- 4 旅人を相手にした遊女が、妃となったのちも旅人のことを毎晩思い出だすということ

[7]

問七 Aの和歌に使われている掛詞の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 鳴海・成る身 ／ 尾張・終わり
- 2 渕見・形見 ／ 尾張・終わり
- 3 我・割れ ／ 誰・垂れ
- 4 いつか・五日 ／ 鳴海・成る身

[8]

問八 本文の作品の成立は鎌倉時代である。成立が同時代のものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 日本靈異記
- 2 宇治拾遺物語
- 3 今昔物語集
- 4 土佐日記



# タブ 3

## 【解答】

・問一 3

・問二 2

・問三 1

・問四 4

・問五 4

・問六 1

・問七 1

・問八 2

## 【解説】

### 問一 文脈把握(理由)

正解:3

・思考プロセス:

傍線部①「我も哀れにて」の直前を見る。

「旧遊(昔の友人)は零落してなかば泉(あの世)に返り」=友は死んだり落ちぶれたりしている。

「己が様々になりにければ」=自分も(出家したり年老いたりと)姿が変わってしまった。

この「友の死・変化」と「自分の変化・老い」の両方を受けての「哀れ(しみじみとした悲しさ)」だ。

・切る技術:

1は「謳歌」が論外。

2は「評価する」なんて書いていない。

4は「都を離れるから」が主因に見えるが、直前の「己が様々になりにければ」という「自身の変化(老い・出家)」のニュアンスを拾っている3がベストだ。古文では「対比」や「並列」を見逃すな!

### 問二 重要文法(反実仮想)

正解:2

・思考プロセス:

これは瞬殺しなければならない問題。

「心や留め【 】……せば」

「……【 】……せば」

文末の「せば(過去の助動詞「き」の未然形+接続助詞「ば」)」を見た瞬間に、「反実仮想」の構文を疑え。

「～せば、……まし」(もし～だったとしたら、……だろうに)。

### 問三 語句の意味・文脈

正解:1

・思考プロセス:

「鏡山」という地名と「映ら」が縁語。鏡に映っているのは「翁(老いた自分)」だ。

「今まで【替へぬ姿】なりせば」=「もし今まで【替へぬ姿】であったならば、(鏡を見て老いを嘆いただろうに)」。

現在は出家して法師(僧侶)になっている。では「替へぬ(変わらない)姿」とは何か?

それは「出家する前の、俗人としての姿」のことだ。

出家して姿が変わってしまったからこそ、昔を思い出している場面だ。

### 問四 文脈把握(理由)

正解:4

・思考プロセス:

遊女(君ども)の生き方を「哀れ」と言っている。その理由は直後に書いてある。

「上の空なる世を頼み」=はかない現世をあてにし、

「契らぬ人を待つ」=約束もない(行きずりの)客を待つ、

「罪の積り」=仏教的に見て好ましくない行いを重ねる。

そして引用文で「貪著(執着)によって、地獄・餓鬼・畜生の報いを受ける」とある。

つまり、「現世のはかない関係にすがり、その結果として来世で悪い報いを受けること」を哀れんでいる。これが読み取れるのは4だけだ。

## 問五 和歌の修辞・常識

正解:4

- 思考プロセス:

「誰と頼めぬ暮れごとに(誰を頼りにしていいか分からぬ夕暮れごとに)」

「いくたび【人】に物思ふらむ(何度【人】を恋しく思うのだろうか)」

主語は遊女だ。遊女が待っている相手は誰か?「客=旅人」だ。

古文において、特に女性が待つ文脈での「人」は、しばしば「恋人」や「訪ねてくる男」を指す。ここでは宿場の遊女の話なので、旅人が正解。

## 問六 指示語・内容把握

正解:1

- 思考プロセス:

傍線部⑤「これに違ふべからず」。「これ」とは何か?

直前の漢文引用部分(経文)を指す。「貪著追求故、……後受地獄・餓鬼・畜生之報」。

つまり、「欲深く執着すれば、死後に悪道(地獄など)に落ちる」という因果応報の法則のことだ。

文脈はこうだ。「遊女は哀れだ。しかし、高貴な妃や偉い人だつて、一度死んでしまえば、この法則(因果応報)からは逃れられない。閻魔大王の裁きに貴賤はないのだから」。

選択肢1が、直前の引用の内容(法則)を正しく説明している。

3も「死は避けられない」という意味で魅力的に見えるが、「これ」が指すのは直前の「地獄等の報いを受ける」という因果の理(ことわり)だ。さらに「違ふべからず」は「(法則に)反することはできない」という意味でとるのが自然。

## 問七 掛詞

正解:1

- 思考プロセス:

和歌の掛詞は、地名と一般語句の掛け合わせが鉄板だ。

• 鳴海(なるみ) ⇄ 成る身(……になつてしまふ我が身)

• 尾張(おわり) ⇄ 終わり(命の終わり・最期)

この組み合わせは、東国への旅の歌として非常に有名だ。知らなくても文脈で推測できるが、「尾張＝終わり」くらいは反応できるようにしておこう！

## 問八 文学史

正解:2

- 思考プロセス:

本文は鎌倉時代。

- 1 日本書紀(平安初期・最古の説話集)
- 2 宇治拾遺物語(鎌倉前期・説話集) → 正解
- 3 今昔物語集(平安後期・最大の説話集)
- 4 土佐日記(平安前期・紀貫之)

文学史は「時代」と「ジャンル」のセットで覚えること。宇治拾遺物語は『こぶとりじいさん』などで有名だが、鎌倉時代の成立だ。

## タブ 4

## 【現代語訳】

昔(私が俗人として官職にあった頃)は、行く末を夕方の雲が隔てて見えない(将来が見通せない)ことを恨めしく思い、再会を明け方の月の頃に心配して(別れを惜しんで)くれる人も多く、また私自身も心残りに思うことがあったのだが、

かつての遊び仲間は落ちぶれてしまい、その半数はあの世へ逝ってしまい、自分自身も(出家して)様々なことが変わってしまったので、私も(しみじみと)悲しくて、遠ざかっていく都の木々の梢を振り返って見ると、それらは(野原に生える)数え切れないほどのナズナ(雑草)と変わらなく見える。

逢坂の関を通り過ぎる時に(詠んだ歌)、

「もしも都に思いを残すような恋人がいたとしたら、この逢坂の関の名のように、『また逢いたい』と心を留めたであろうなあ。(実際はいないので、未練なく通り過ぎることだ)」

鏡山を越えるということで、昔見た時とは変わってしまったあちこちの様子を見て、以前(この道を通ったとき)の縁までもが懐かしく思い出され、自分が年老いてしまった年齢の程も身に染みて感じられて(詠んだ歌)、

「もしも今まで(出家せずに)昔と変わらぬ姿でいたとしたら、(鏡山に映った老いぼれた自分の姿を見て)『私の知らない老人が映っている』と思っただろうかなあ。(実際は出家して姿が変わっているので、老いた姿も当然のこととして受け止めている)」

小野の宿に泊まったところ、そこにいる遊女たちの様子が格別に哀れに感じられる。(彼女たちが)世間を渡っていく道は、どれも苦しいのが世の習いであるので、ただ不安定で頼りない世の中をあてにし、夫婦の契りも交わしていない(行きずりの)男を待つよりほかにやることもなく、そうしながら、罪が積もっていくのも気の毒で、

「また、貪り執着し追い求めるがゆえに、現世では多くの苦しみを受け、来世では地獄・餓鬼・畜生の報いを受ける」という(お経の)言葉は、決して疑ってはならない。

(遊女たちのことを思って詠んだ歌)

「ああ気の毒なことだ。頼みにできる相手もいない夕暮れごとに、生活のために一体何度、通りすがりの旅人を恋しく思っているのだろうか」

(彼女たちのような)世間の旅人は言うまでもなく、妃のような優れた容貌の人や、高貴な家柄や富豪・賢者といった立派な人であっても、一度死んで目を閉じた後は、この(因果応報の)理(ことわり)から逃れることはできない。(地獄の)獄卒や閻魔大王による責め苦には、身分の高い低いの区別などないはずである。

(無常を感じて詠んだ歌)

「いつかは私も、はかなく死んで(鳴海渦の海のように)なってしまう身である。(身の)終わり(尾張)からは、誰が逃れられようか(いや、誰も逃れられない)」

## 【ポイント】

- ・反実仮想の訳し分け:和歌の部分の「～せば、……まし」を、「もし～だったら、…だろうに」としつかり訳出できているか確認しろ。これができないと、実際の事実(恋人はいない／出家している)と逆の意味にとってしまう！
- ・仏教用語:「地獄・餓鬼・畜生」などの言葉が出てきたら、当時の「無常観(死んだら何も残らない、現世の行いが来世に関わる)」というテーマを意識して読もう！

## タブ 5

## 【練習問題】

### Q1(文法・重要構文)

次の短歌の(　)内の現代語訳として最も適切なものを選べ。

「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」

(『古今和歌集』在原業平)

1. 春の心はのどかだつただろうに(実際はのどかではない)
2. 春の心はのどかだつたからだ(実際ものどかだつた)
3. 春の心はのどかになってほしい(願望)

### Q2(単語・重要語)

古語「あはれなり」の訳として不適切なものを一つ選べ。

1. しみじみと趣深い
2. 気の毒だ・かわいそうだ
3. 盛大だ・騒がしい
4. 愛しい・かわいい

### Q3(文学史)

次の作品のうち、鎌倉時代に成立したものを一つ選べ。

1. 『源氏物語』(物語)
2. 『平家物語』(軍記物語)
3. 『更級日記』(日記)
4. 『枕草子』(隨筆)

### Q4(和歌・修辞法)

次の和歌の(　)の部分に使われている修辞法(技法)の名を答えよ。

「立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む」

(『古今和歌集』在原行平)

- ・ヒント:「松(木の名前)」と「待つ(動詞)」を掛けている。

Q5(文法・助動詞)

「～らむ」(終止形接続)と「～けむ」(連用形接続)の意味の違いとして正しいものを選べ。

1. 「らむ」は過去推量、「けむ」は現在推量
2. 「らむ」は現在推量、「けむ」は過去推量
3. どちらも未来推量

Q6(単語・多義語)

古文における「世・世の中」という単語が、文脈によって持つ特定の意味として、最も頻出するものを一つ選べ。

1. 政治の世界
2. 男女の仲・夫婦関係
3. 戦乱の世
4. 外国のこと

## タブ 6

## 【練習問題の解説】

A1:1(春の心はのどかだっただろうに)

- 解説:「せば～まし」は反実仮想の定型。「もし(現実にはありえないが)桜がなかったとしたら、…のどかだっただろうに(実際はあるから、散るのを心配して落ち着かない)」。この構文は必修!

A2:3(盛大だ・騒がしい)

- 解説:「あはれなり」はプラス(趣深い・愛しい)にもマイナス(悲しい・気の毒だ)にもなるが、根底にあるのは「しみじみとした情趣」だ。「騒がしい」という意味はない。

A3:2(『平家物語』)

- 解説:
- 『源氏物語』『枕草子』『更級日記』はすべて平安時代中期～後期。
- 『平家物語』『方丈記』『徒然草』『新古今和歌集』『宇治拾遺物語』などは鎌倉時代。
- 「貴族の平安」から「武士・無常観の鎌倉」へ、時代の空気が変わるので意識しよう。

A4:掛詞(かけことば)

- 解説:一つの言葉に二つ以上の意味を持たせる技法。今回の授業の「鳴海(なるみ)／成る身」「尾張(おわり)／終わり」と同じパターンだ。

A5:2(「らむ」は現在推量、「けむ」は過去推量)

- 解説:
- らむ=今どうしているだろう(現在推量)
- けむ=昔どうしていただろう(過去推量)
- 視点が「今(目の前のこと)」か「過去」かの違いだ。これも頻出。

A6:2(男女の仲・夫婦関係)

- 解説:「世を捨て」なら「出家する」だが、「世・世の中」単体で文脈によっては「男女の仲(恋愛・夫婦関係)」を指すことが非常に多い。「世を知る」で「恋愛の機微を解する」という意味にもなる。今回の本文の「世の旅人(遊女)」という表現も、このニュアンスを含んでいる。